# 戦国武将伝

## 東日本編

目次

黄斑（おうはん）の文（ふみ）

竹千代の値

汁かけ飯の戦い

青に恋して

阿呆に教えよ

由利の豪傑

義元の影

［群馬県］長野業正……7

［東京都］徳川家康……19

［神奈川県］北条氏政……33

［千葉県］里見義弘……49

［愛知県］織田信長……63

［秋田県］矢島満安……79

［静岡県］今川義元……91

裸の親子 ［山形県］最上義光……103

武州を駆ける ［埼玉県］太田資正……117

暮天の正将 ［山梨県］武田信玄……129

高くとんだ ［福井県］富田長繁……143

蒼天の代将 ［新潟県］上杉謙信……157

津軽という家 ［青森県］津軽為信……169

半夏生（はんげしょう）の人 ［富山県］佐々成政……179

雅なる執権　［福島県］　金上盛備……189
完璧なり　［岐阜県］　竹中半兵衛……203
春に向けて耐えよ　［栃木県］　宇都宮国綱……217
鬼の生涯　［茨城県］　佐竹義重……229
風の中のレラ　［北海道］　蠣崎慶広……241
頂戴致す　［宮城県］　伊達政宗……257
松斎の空鉄砲　［岩手県］　北信愛……269

猿千代の鼻毛
［石川県］　前田利常……281
真田の夢
［長野県］　真田信幸……293

# 『戦国武将伝　西日本編』目次


十五本の矢　［広島県］　毛利元就
謀聖の贄（にえ）　［島根県］　尼子経久
帰らせろ　［山口県］　大内義興
九兵衛の再縁　［奈良県］　松永久秀
老軀、翔ける　［佐賀県］　龍造寺家兼
宇喜多の双弾　［岡山県］　宇喜多直家
四杯目の茶　［滋賀県］　石田三成
雷神の皮　［大分県］　戸次道雪
何のための太刀　［三重県］　北畠具教
未完なり　［兵庫県］　黒田官兵衛
夢はあれども　［鳥取県］　亀井茲矩
泥水も美味し　［宮崎県］　伊東祐兵

海と空の戦士　［長崎県］　有馬晴信
小賢しい小姓たちよ　［熊本県］　加藤清正
孫一と蛍　［和歌山県］　雑賀孫一
旅人の家　［京都府］　足利義昭
土を知る天下人　［大阪府］　豊臣秀吉
三好の舳（みよし）　［香川県］　十河存保
土佐の土産　［高知県］　長宗我部元親
証を残す日々　［愛媛県］　加藤嘉明
怪しく陽気な者たちと　［鹿児島県］　島津義弘
三坪の浜の約束　［沖縄県］　謝名利山
古狸と孫　［徳島県］　蜂須賀家政
立花の家風　［福岡県］　立花宗茂

群馬県

長野業正

# 黄斑(おうはん)の文(ふみ)

# 一

天文十五年（一五四六）の春のことである。真田幸隆は自身の屋敷を出て、城へと向かった。城までの途中、山桜の大木がある。見事に咲き誇っており、麗らかな春風を受けて花弁を舞い散らせている。

心躍るような光景であるはずが、今の幸隆はそれを美しいとも感じられない。この一月の間、幸隆は悩みを抱えて悶々とした日々を過ごしていた。

城に着くとすぐに案内され、城内の一室へと導かれた。

「参りましてござる」

「来たか」

文机に向かっていた男が振り返り、にかりと白い歯を覗かせた。

男の名を長野業正と謂う。長野家は上野国の豪族で、関東管領を務める山内上杉家の麾下に入っていた。

上野国の守護代は白井長尾家だったが、当主が暗殺されて没すると、長野家は次第に力を強めていった。今では実質的な守護代の地位にあるといってもよい。

主君の山内上杉家の勢力圏は広大であったが、小田原の北条家の侵攻を受けて顕著に領地を減らしている。そのような凋落の最中の山内上杉家を支え、八面六臂の活躍を見せているの

がこの業正で、その凄まじい豪勇ぶりから、
——上州の黄斑。
などと呼ばれていた。
「達者にしていたか」
業正は目尻に皺を寄せた。
「十日前にお会いしたばかりですぞ」
「そうか、そうか」
自らの額をぴしゃりと叩き、業正は呵々と笑った。
幸隆がこの上野に住んでからは、少なくとも月に一度、多ければ三度ほど業正からお呼びが掛かり、こうして訪ねてきていた。
「やるか」
「はい」
すでに用意されていた碁盤を挟み、向き合って座った。呼ばれる訳はこれである。業正は碁が大好きで、しかも滅法強い。家中の者では誰も相手が務まらず、置き石をさせてやっていたが、そればかりではつまらない。そんな時に幸隆が巧みな碁を打つと聞きつけ、一局打つことになった。実力は五分といったところで、業正はこれを大いに喜んで、こうして度々相手を所望されるようになっているのだ。
「もう春だというのに指が冷たい。歳かのう」

業正は碁石を手に持って自嘲気味に笑った。
業正は延徳三年（一四九一）の生まれというから、当年で齢五十六。幸隆は今年で三十四歳となるため、ちょうど親子ほど歳が離れていることになる。
「未だに馬を駆って敵陣に切り込む御方が、何を仰いますやら」
幸隆は苦く頬を緩めた。
実際、業正は五十六歳とは見えぬほどに若い。鬢のあたりに白いものは混じっているが、艶のよい鞣革の如き肌をしている。
そして今言ったように、この歳になっても馬を疾駆させ、大将自ら太刀を片手に敵の首を挙げるなどということも、間々あった。
「ところで、上野には慣れたか？」
業正はぴしりと碁石を打ちつつ尋ねた。
「お陰様で」
幸隆は石を手で揉みながら答えた。
そもそも幸隆が上野国に来たのは五年前のこと。もともと真田家は北信濃の豪族であった。だが甲斐の武田家が侵攻して、それに抗ったものの遂には敗れ、故郷を捨てて逃亡することとなった。そのような己を庇護してくれたのが、この業正であった。
武田家は、山内上杉家の敵である北条家と同盟関係にある。信濃から上野への進出も窺っており、これまで幾度か業正とも火花を散らせていた。

――いずれ領地を取り返す。
業正はそう約束してくれた。故に己を長野家の家臣に組み込まず、客将という形で置いてくれているのだ。
「そう来るか！」
幸隆の一手で、業正は吃驚して仰け反った。
戦場では鬼の如き強さを誇る業正だが、日々はこのように童のような一面も見せる。それが業正の魅力であり、家臣たちもよく懐いている。
幸隆もまた、業正のそのようなところが堪らなく好きであった。
「今日は勝てそうですぞ」
幸隆は口元を綻ばせた。ここのところ業正の勝ちが続いており、一つ負け越している。
部屋の中に暫し碁石を打つ音だけが響き、やがて勝敗が付いた。結果は幸隆の勝ちであった。
「四連勝はならずか。これでまた五分……次は儂が勝つぞ」
業正は不敵に笑った。幸隆も笑みで応じたが、一瞬の間が空いてしまった。業正と共に過ごす時はあまりに心地よく、忘れてしまいがちだが、その一言が悩みを喚起させたのである。
――次が来るだろうか。
と、いうことである。
一月ほど前、武田家から幸隆を召し抱えたいとの書状が届いた。真田家の旧領は全て返すど

ころか、加増までするという好条件であった。北信濃には多くの豪族がおり、武田家としても取り纏めるのに苦労している。それを幸隆に担わせられるならば、少々の土地など惜しくはないという考えだろう。

幸隆はこの申し出を呑むつもりでいる。真田家の本領復帰は己の宿願。それが叶えられるならば断わる理由はない。

ただ一つ、落魄の己を置いてくれるだけでなく、こうして親しく付き合ってくれた業正に心苦しさを感じていた。

「はい」

脳裏にそのことが過っていたため、やや曖昧な調子の返事になってしまった。

だが業正はそれに気づいてはいないようで、やはり抜けるような笑みを見せて大きく頷いた。

## 二

武田家には受ける旨をすでに伝えている。ならば期日を決めるのでそれまでに上野国を出て、信濃国へ戻って来いとの返事があった。その期限がもう間近に迫っているのである。

――明日、ここを発つ。

業正と碁を打った六日後、幸隆は決心し、妻や家臣にもそのことを打ち明けた。

上野国から抜けようとすれば、業正もその意図を察する。そうなれば幾ら己に良くしてくれたからといって、流石に捕らえようとするだろう。多くの人数で逃げれば、すぐに追いつかれてしまう。

「儂は一人で行くつもりじゃ」

幸隆は膝の上に置いた拳をぐっと握りしめた。

「真田家復興のためです」

妻はすぐ得心してくれて、そう答えた。

己を怨みはするだろうが、人品に優れた業正が妻や家臣を殺すことまではしないだろう。そこまで計算している己が嫌で、同時に業正への懺悔の念はさらに強くなり、上野国で過ごす最後の夜は、遂に一睡も出来ぬまま朝を迎えた。

朝、支度を終えて屋敷を出ようとした矢先、業正からの使者がやって来た。

――今日、一局打とうではないか。

という誘いである。

これまでは数日前、少なくとも前日までに誘いがあった。このように当日に誘われるのは初めてのことである。

――お気付きになられたか。

幸隆は下唇を噛みしめた。

業正は世に隠れもなき名将である。己の些細な変化を見抜いたことは十分考えられた。

「今日は躰の具合が悪いと」
幸隆は家臣に命じ、使者にそのように答えさせた。
――日を改めるしかあるまい。
こうなると今日は強行するほうが危うい。暫くの間、病を装って家に引き籠もり、機を見て夜陰に紛れて抜け出すしかないと考えを変えたのだ。
四半刻（約三十分）ほどすると、また業正からの使者が訪れた。
今度はどうしても面会して話したいとのことで、幸隆は敢えて寝間着に着替えて使者と会った。使者は業正からの口上を、一言一句違わずに伝えると言った。
「お主ほどの者が寝込むとなれば、尋常の薬では治らぬ病と見た。甘楽峠を越えたところに、当家のみ知る良薬が群生する地がある。案内を付ける故、そこまで薬を採りにいかれよとのこと……」
「お気遣いありがたい。ただ思ったよりも悪く、私が採りにいくのは……」
「今も申し上げたように、薬草のある地は長野家の秘事。こればかりは幸隆殿自らでないと困る。ただ必ず効く故、すぐにでも発たれるがよい」
「解りました……」
幸隆は細く息を吐いた。業正は気付いている。そして幸隆が一人になったところで、討ち果たさんとしているのであろう。
己はあれほど目を掛けてくれた恩人を裏切った。業正の怒りは当然であるし、その罰が当た

ったのだと覚悟を決めるほかない。
使者にこっそり教えてもらい、幸隆は身支度を整えると、馬に乗って薬草が生えるという地を目指した。
「そろそろか」
下仁田に差し掛かった時、幸隆はぽつりと呟いた。
薬草の地が近いという訳ではない。己を討たんとすれば、この辺りで襲って来ると踏んだのだ。
その時、背後から馬の嘶きが聞こえた。馬を駆るでもなく、幸隆はゆるりと進む。だが背後から声が掛かって、幸隆は勢いよく振り返った。
「どういうことだ……」
追って来ていたのは妻であり、家臣たちであったのだ。馬が曳く荷車の上には家財までが満載されている。
「何があった」
幸隆は妻に向けて訊いた。狼狽を抑えきれず声が上擦る。
「殿が発たれた後、長野家の使者がまた来られ……」
――幸隆は出奔したと見ゆる。家財を纏めて即刻、ここから出ていけ。
と、命じられたらしい。しかも馬や荷車まで手配する手際の良さであったという。
「そしてこれを。信濃に入った後に開けと」

妻は一通の書状を取り出した。
どのような事態なのか皆目解らないが、ともかく皆で信濃を目指すことにした。そして言葉通り、信濃に入ったところで幸隆は書状をゆっくりと開いた。
「俺は大馬鹿者よ……」
幸隆は声を震わせた。
業正はやはり全てを見通していた。だが家臣たちの手前、堂々と敵方に奔るのを許す訳にはいかない。故に一計を案じたのである。
書状には続いて、これまでの楽しかった日々の礼、最後に別れを言えなかった詫びまで綴られていた。
「詫びるのは……こちらでござる……」
幸隆は頬に伝う涙を拭わずに読み進めた。
武田信玄はまだ若いが相当な弓取りである。励めば大いに真田家の道も開けよう。ただこの業正の目の黒いうちは、上野国には一切踏み込ませるつもりはない。真田家は上野攻めの先鋒を命じられることになろう。
――続きは戦場で。次は儂の勝ちだ。
といったように締めくくられていた。
業正の豪快な笑みが脳裏に浮かんで消える。長野業正と謂う男は並ではないとは解っていたが、己が思っていた以上に大きく、そして強い人であったと改めて胸に刻んだ。

「負けませぬぞ……」
嗚咽を堪えつつ、幸隆は絞るように零した。
この恩に報いるため、その時が来れば、全身全霊を懸けて挑もうと心に決めた。
峠の道を山桜が彩っている。不思議と数日前に見た時よりも鮮やかに目に映る。この景色を生涯忘れることはないだろうと感じ、幸隆は涙をそっと指で拭い、微笑みを春のそよ風に溶かした。

幸隆披き見れば、甲斐に武田信玄あり、若き人に又有間敷弓執なり。但し蓑輪に業正があらん限りは、左右なく碓氷川を越て馬に草飼はんと思ひ給ふべからず、速に本領に歸り入り給はば、鄰交を忘れ給ふこと有間敷由抔、細々と書たり。幸隆も業正の心中恥か敷思ひ斯くあらんと兼ねて知りたらば、打明けて語ふべきに、包みしことこそ拙なけれ、と馬を止めて暫時はイめり……（『名将言行録』）